法人）の中村努施設長に相談したところ、紹介されたのが西村氏だったという。

その西村氏が研究会に招かれ、早々に提案したのがRSN構想。過度にのめり込むのは背景に人それぞれの問題があるからで、相手に寄り添い、それが何かをときほぐすために、サポートする機関が必要とする考えは、力武氏が日頃の接客のなかで感じていたものとも通じるところがあったと話す。

2006年2月23日に
都内で行われたRSN設立記者会見

中村氏

力武氏

来店するのに借金!? 現状への違和感が原点

力武氏は当時、大分県遊協の一理事の立場だったが、ホール経営者としては先駆けて依存問題に関わってきたことから、全国組織の研究会メンバーに抜擢された。

依存問題に関わるようになったのは2000年頃からで、きっかけは「違和感」だった。

昨日10万円を使ったのに、今日も10万円使っている顧客がいる。駐車場の車のワイパーには消費者金融のチラシが挟まっている。実際、来店するために借金している顧客がいるとも聞いた。

「大衆娯楽といえるのかという疑問がわいてきたのです。IR議論の活発化に伴い、いずれはパチンコ依存がもっと取りざたされるという危機感もありました」

そこへある人から紹介されたのがワンデーポートの中村氏だった。「電話で私の違和感を伝えたところ、とても共感してくれたのを覚えています。そこから、県遊協主催の依存問題セミナーで講演していただくなどの交流が始まったのです」と言う。

忘れられないのはワンデーポートの告知ポスターを系列店に掲示したところ、すぐに2人が同施設に電話をかけてきたことだ。

「掲示したのは1店舗。同様の問題を抱えるお客様が全国にはどれだけいるのかと思いました」

それから15年余。力武氏は「業界では安心パチンコ・パチスロアドバイザー制度をはじめ、さまざまな依存問題対策に取り組んできましたが、常に中軸を担ってきたのがRSNです。設立できて本当に良かった」と評価する。

依存問題のコアな人材育成というRSNのもう一つの役割にも言及。現在、業界関係企業の社員の研修制度という受け皿があることに触れ、「できればメーカーも活用を」と呼びかける。

ホールのRSN告知ポスター。
本人からの電話が8割強というのがRSNの電話相談の大きな特徴

RSNは沖縄県那覇市に隣接する
西原町の住宅街の一角にある▶

今年4月からは
パチンコ・パチスロ依存問題の知識が
動画で学べるeラーニングもスタート。
申込みはホール企業単位となっている
（2022年3月まで無料）▶